



編集委員 古根川淳也

あ・ん

テレワークの功罪

やはりテレワークは普及している。東京の企業に問い合わせをする。担当者が自宅で応じるケースが増えた。感想を聞くと、それほど違和感なく仕事ができるという。

私は中央支局に勤務している。支局といっても事実上の社宅で、寝室横の4畳半が仕事場だ。働き方はテレワークそのもの。月に4回ほど姫路本社に出勤して同僚と顔を合わせ、以外、一人で取材して記事を書き、パソコンで会社に送信すれば業務が完了する。通勤はないし、周囲の話し声に気が散ることもない。

取材記者歴14年のうち支局が3カ所、計13年になる。私の経験は、テレワークの普及でサラリーマン氣質がどう変化するかを予測する貴重なモデルケースになるだろう。

支局記者の長所は言うまでもないので短所を挙げると、やはり孤独である。相談も雑談も、相手が暇そうな時こそ声を掛けやすい。電話では

タイミングが見えないし、メールで文面にすると大げさになる。

そして、仕事を覚える機会が減る。職場で緊急事態が発生すれば先輩たちの対応を横で学べるが、在宅ではかやの外だ。

やはり、人は人の間で磨かれて成長する。企業の文化や価値観も、職場の人間関係の中で継承されてきたと思う。そうした影響をあまり受けなかった私は、絶海の孤島で独自の進化を遂げたガラパゴス記者、というのが自己分析である。

テレワークを標準の働き方として定着させる動きは広がっている。この機会に地方移住を考える人も増えているようで、中央支局がホームペーシに掲載した「空き家バンク」の閲覧数は倍増しているという。東京一極集中を解消するチャンスだが、特に若い世代には人の間で磨かれる経験を確保し、うまく組み合わせて快適な働き方を実現してほしい。

6月21日(日) 神戸新聞分

便利は不便。

4次元、5次元空間になるからと言って3次元空間の良さが保たれているわけはないですね。

アナログな人間としては、本当にこのままて人は良いのか？と感じずにはられません。